

創造性の生まれる地盤 (二)

恩 田 彰



幼児の創造性を育てる教師となるには、どのような心構えを持つたらよいだろうか。今回は主に創造性を養う教師自身のあり方を中心にして考えてみようと思う。

1 教師が創造的であること

子どもの創造性を開発するには、教師が創造的であればならない。すなわち教師が自己の中に創造性を見出し、これを実現することができるとともに、子どもの中に創造性を発見し、これを実現させることに援助できることが大切である。

2 子どもの長所を発見する

誰でも長所と短所を持っているものである。また短所がそのまま長所にもなっていることもある。そこで子どもの長所を認め、子どもの健全に成長しようとする意欲と能力を発見し、それを伸ばしてやるのである。子どもの可能性の発見は、実現の契機となるものである。子どもが自分で自己の長所を見つけて伸ばすことは、容易ではないが、教師は子どもの長所を発見することは子ども自身より容易だし、それが故にやらなければならぬと思う。そうすることによって子どもが成長するにつれて、自己の可能性を見つけて、それを発揮することができるようになるのである。

3 動機づけと評価

創造性を育てるには、子どもにも創造活動を行なわせ、これによって創造活動がおもしろいこと、すばらしいことだという喜びを味わわせ、自分にも創造活動ができるのだという自信を持たせ、創造活動に動機づけることが大切である。

また創造性の養成には、評価が非常に重要である。評価は、動機づけとくに賞罰の与え方と密接な関係がある。

従来の評価が、個人の能力を比較的に固定視し、子どもにもそのような考え方を植えつけるので、「自分はこの程度のことしかできない」と自己の能力や傾向を限定させることになる。中には「なぜこんなことができないの。だめじゃないの」と叱りつけたりして、成長する自我を萎縮させ、成長する動機を抑制してしまうことにもなる。

そこでこんなことなら、いっそ評価しない方が創造性を伸ばすことができるのではないかとという考え方も出てくる。問題は評価するのがいいかどうかではなくして、その方法や評価する人の態度にあると思われる。子どもは賞を与える方向に学習し、罰を与える方向をさげようとする。そこで作品の指摘にさして「ここがよくないわね」と欠点を指摘する批判的評価よりも、「このところおもしろいわね。そのところをもう少し考えてごらんなさい」または「ここをこうするともっとよくなるかいかしら」と建設的に問題点を指摘するような評価のしか

た、すなわち指導過程ではヒントともいうべきものが創造活動を促進すると思う。

4 暖かい、受容的、理解的なふんい気

学級に暖かい受容的理解的な、ふんい気をつくる必要がある。創造的な子どもは、その行動が生産的であるが、逸脱することがあるので、このため制約を受けたり、仲間から孤立してしまうことがある。この場合これらの子どもと理解して、暖かく受けいれるふんい気が学級の中につくりあげられなければならない。これは子どもの創造性の成長のために必要なことである。子どもが教師や仲間との間に安定感と愛情を感じとる時、創造性が成長していくのである。

5 教師の探究心

子どもの探究心は、未知の世界をたえず探索している教師によって養われるものである。トラーランス (Torrance, E. P.) は、創造活動への動機づけと知的好奇心が高い先生に教えられ、子どもは創造活動が盛んになるが、その低い先生に教えられると、創造活動はかえって低下すると述べている。

ある先生が子どもに工作をやらせようとして、自らそれをつくって、「先生がこれを昨日いっしょうけんめいつくったのよ。おもしろかったわ。みんなもつくってみない」といって、その試作品を見せたところ、子どもたちは喜んで、それを作ったという。このように教師自ら探究心、好奇心をもっていると、子どももそれに刺激されて、探究心や好奇心を持つようになるものである。

6 思考と注意集中

アイデアは、いっしょうけんめい集中的に考え、注意を集中した時期があつて、そこから生まれることが多い。また仕事を忙しくやっている間に、時には夢想したり、ぼんやりしている時間もある。もしぼんやりするヒマがないという人は、雑用を間に入れたり、他の仕事をはさんだりして、気分転換をはかるとよい。注意集中の後や仕事からしばらく離れた時にアイデアが熟して出現することが少ないからである。

7 純粹な心

純粹な心は、無心とか清い心とかいわれて、創造活動の基礎

となるものである。東京工業大学名誉教授の加藤与五郎先生は、九六歳の高齢で亡くなったが、一生のうち約六百の発明特許をもつておられた。そして先生は「創造は、最後は直観の形でとらえられる。直観をうるには、きびしい訓練すなわち集中の訓練が必要である。しかもその裏には清い心が必要である」と指導しておられたということである。また岡潔先生は、数学は純粹童心から生まれるといっている。

この純粹な心からインスピレーション、アイデアや悟り、その他の創造活動が生まれている。この純粹な心のように、ゆがみやとらわれない、すなわち固定した構えのない状態から創造活動が生まれるので、その点幼児は本来そういう傾向を持っているので、親や教師が幼児の素直な心に学ぶところが少ないと思う。

8 教えることより大切なこと

子どもに教えることとするより、教師も子どもとともに学ぶという姿勢が必要である。指導目標はしっかり持つことは大切だが、子どもがどう活動していくかを見守り、目標にたらずして適切に援助していくことが大切である。教材はできるだけ最も必要なものだけにとどめ、これをじゅうぶんに習得させ、操作

させ、できるだけ考えさせる時間を多くする。知識を与えることも必要であるが、できるだけ子どもに事実と法則を発見させるのである。

9 驚く能力を養う

子どもに未知のものに驚くことができ、いつも新鮮な態度で物事に接する態度をつくる必要がある。「初心忘るべからず」とは、創造的態度の形成に関連をもっている。知識ばかり多いと、本当のことがわからないのに、「わかっている」と思いついこむようになる。「そんなこと僕知っているよ」といって、驚きを失っていて、自分で探索しようとしなない。それでは創造性は育たない。そこで子どもをいつも驚くことのできる人間に育てたいものである。

10 子どものアイデアを大切に

子どものアイデア、創意を大切にしたいものである。子どものアイデア、創意工夫を大切にすることは、教師が子どもの人格を、子どもの可能性を重視していることになるのである。そうすれば子どもは創造することに喜びと自信をもつよう

になるであろう。

11 豊かなイメージ

創造性にとって大切な創造的想像には、豊かなイメージの蓄積が必要である。創造的想像は、経験からくるイメージを組み合わせて、新しいイメージをつくり出すことである。そのイメージを豊かにするには、いろいろな経験とくに直接経験をもつこと、それによって物事に対する感受性を高めることである。また間接経験としては、文学、映画、テレビやラジオなどにふれることによって、いろいろなイメージを養うことができる。

12 模倣と創造

創造と模倣とは一見対立しているものとして考えられているが、実は模倣を通して創造活動に導かれることが多いのである。私たちは、ふつう模倣しても、それに引き続いて自分独自のものを生み出しているのである。人間は所詮模倣の段階に安住できないのである。

たとえ同じことをするようにいわれても、類似したことはできるが、決して同じことはできない。また模倣を業とする人

は、その仕事のために創意を働かせているのである。模倣は、身体を媒介にして、対象の性質や機能をつかむことに意義があるのであるから、子どもにはできるだけ一流のものを模倣させることが必要である。

13 アイデアの記録

アイデアというものは、予期しない時に、思いがけないところに出てくるものである。そこでうっかりすると、切角でできたいアイデアをつかみそこなうことがあるものだ。そこで浮かんできたアイデアは、ノートか手帳に記録しておくことが必要である。

また、子どもはときどきおとなをびつくりさせるようないいアイデアを出したり、創造活動をするものである。子ども自身の創造活動を促進するためにも、その時期、場所、その経過などを書きしるしておく、指導の手がかりがえられると思う。

14 自己実現

トズロー (Maslow, A. H.) は、創造性を「特別な才能の創造性」と「自己実現の創造性」にわけたが、ここでは誰でも持

っている後者の創造性を問題にしたい。自己実現とは、自己の可能性すなわち自己の潜在能力を表現することで、その人独自の個性的な活動を行なうようになることである。

トランスは、創造性を育てる教師になるためには「何か独自の価値あることに貢献しようと思ったら、自分自身に忠実になりなさい」という古い格言を引用して、「自己自身に忠実であれ」と説いている。

しかし人間の心には、見栄や外見を気にし、他人からきらわれたくないと思ひ、積極的に、無意識的に自己の能力の發揮を押えてしまう傾向がある。実はこの自己を敗北せしめることが、自己実現を妨げるものである。

そういう意味では、自己実現の創造性を發揮するには、ありのままの自己を見つめ、自分が自分自身になることである。そこに自我と他我が一体となり、自己と他者とが融合した真実の自己が出てくるのである。

その時に直観が鋭く働き、生き生きとして、自由に、創造的にふるまえるようになるのである。

(東洋大学)

トズロー (Maslow, A. H.) は、創造性を「特別な才能の創造性」と「自己実現の創造性」にわけたが、ここでは誰でも持

☆

☆

☆

☆